

「くれの廿八日」考(一)

— 本文の解説を中心に —

はじめに

「くれの廿八日」は明治31年3月^{注1}、「新著月刊」^{注2}に発表された内田魯庵の代表作である。『内田魯庵全集』^{注3}が刊行される以前に於ても数多くの文学全集類に収められ、岩波文庫の一冊にもなつて、恐らく魯庵の著作の中で最も広く紹介されて来た作品であろう。

しかしながら、「くれの廿八日」が代表作としての地位を得ているのは、純粹にその作品内容のみを評価してのことではない。そこには「社会小説」の先駆的作品であるという、文学史的な評価が多分に付加されているように思われる。

「くれの廿八日」を「社会小説」とする捉え方は、木村毅氏によつて提唱された。^{注6}木村氏は、同時代評が「宗教小説」或いは「家庭

小説」とのみ捉えている点に関して「社會的價值について一向盲目」^{注7}だと批判し、「社会小説」としての「資格を具備」した名篇だと位置づけたのである。

それ以後、本間久雄^{注8}、小田切秀雄^{注9}、瀬沼茂樹^{注10}、猪野謙二^{注11}、吉田精一^{注12}、稻垣達郎^{注13}、三好行雄^{注14}、飛鳥井雅道^{注15}、中村元^{注16}、中山栄暁^{注17}、山田博光^{注18}、片岡哲^{注19}、堀井哲夫^{注20}といった諸氏によつて、「くれの廿八日」を「社会小説」とみる立場は、継承されている。

理想と現実、或いは事業熱と家庭との相剋を描いた点に「社会小説」とする根拠を求める説(本間、吉田、三好、飛鳥井、中村、瀬沼氏等)、純之助の理想に「ユートピア思想」を見出す説(瀬沼、猪野、三好氏等)、キリスト教の問題、男女対等思想等を含めて題材の社会的広がり、社会的視野の広さを根拠とする説(小田切、瀬沼、

木村 有美子

猪野、稲垣、片岡氏等」といったように、その根拠とするところは一定ではない。中には時代的要請に答えた作品と捉えながら「功名心と愛」の問題を「知識人純之助の苦悩」として捉える玉井説や、純之助の行動性の幅が「社会小説としての実質を保証」しているとする中村説、又、結末部分で純之助が家庭の和合を重んじようとする姿勢に、魯庵自身の願望を重ねる稲垣、堀井説も見出せるのである。

抑も「國民之友」（明治29年10月）の「社會小説出版予告」に端を発した「社会小説」論議は、様々に論じられながら決定的な定義づけがないまま消滅したため、一概に「社会小説」と言ってもその観点や根拠が一樣でないことは頷ける。が、全般的に、当時の社会情勢を背景として成立した「社会小説」であるという把握に於て、これらの論は木村氏の説の延長線上に位置づけられよう。

これに対して少数ではあるが、「くれの廿八日」を「社会小説」と見做さない捉え方も提出されている。野村喬^{注22}氏は、魯庵が「社会小説」を唱道したとする従来の説を否定し、「くれの廿八日」が「浮雲」「舞姫」等の系列に位置する「知識人の自我を抉った作品」だと主張しているし、田中栄一^{注23}氏は、行動的・進歩的知識人と捉えられて来た純之助像に疑問を呈し、静江によつて語られるヒューマニズムに作品の主題を見ている。小泉浩一郎^{注21}氏は『文學一斑』の中の「悲歡劇」の理論を踏まえた作品だとし、その主題を「人の運命」への味到にあると言う。高橋修^{注25}氏は、小泉氏の指摘する「ドラマ」との関連は否定しながら、純之助の自己本位の理想の挫折を「運命」と捉え、「社会小説」と見ない根拠としているのである。又、木谷喜

美枝^{注26}氏は、「八行動」しない知識人の問題」として「浮雲」を継承し、「知識人の冷静さ」の点で『半日』に承けつがれてゆく位置を「持つている」と指摘しているのである。

このように二つの捉え方を許す「くれの廿八日」とは一体どのような作品なのであろうか。木村毅氏が指摘するように「不知庵の傑作のみならず、明治文學としても屈指の名篇」と呼べるものなのか、或いは、猪野謙二氏の把握どおり、二葉亭から自然主義に至る日本近代文學の主流と、政治小説から社会主義小説に至る傍流の「結節点」といえるだけの内容を持つているのか、まずは、「社会小説」という呪縛から解き放つて、一小説として本文を解読、分析するところから始めようと思う。

とはいえ、明治31年に発表された作品を今日の文学評価の物差しで計るわけにはいくまい。そこで、文芸批評家不知庵の評価基準を用いて、小説家魯庵の処女作の出来映えを論じることにした。

一、人物描写

さて、魯庵の評価基準を用いて分析するには、まずその基準について述べなければならない。が、魯庵の場合、これは至って明快である。「山田美妙大人の小説」^{注27}で文壇に登場して以来、「くれの廿八日」を発表するまで、文芸批評や評論に示された魯庵の評価基準、或いは文学観は、時として頑固に思えるほど終始一貫している。^{注28}まず、魯庵が何よりも小説に求めたのは、人物の活写、心理の掘

り下げということであった。作品評価の分かれ目は殆どこの一点にあるとも言えた。「小説を編にはキャラクターこそ肝心なり」^{注29}「小説に重んずべきは、自然よりは却て人為を描寫するに」^{注30}ある、「人情を描寫するに力を費さずして能く細微に及ぶは誰か敬服せざらんや」^{注31}（注—傍線は筆者による）と言葉は変化しているが、魯庵が常に人物描写を重視していたことは、こうした評語の中にも窺える。

では、「くれの廿八日」の人物はいかに描かれているだろうか。かつて魯庵は紅葉の「南無阿彌陀佛」を評価して、^{注32}その長所の一つに「人物を顯する僅少なりしこと」を挙げていたが、この作品の登場人物も極めて少数である。主人公の有川純之助、その妻のお吉、純之助の亡友の妹中條静江、媒妁人の高橋善兵衛、本家の朔一老人、有川家の奉公人の銀、濱、久助、そして純之助の友人たちである。

この中で重要な役割を果たすのは前三者で、この三人の関わりを描くことで小説が展開していくといってもいい。この中で最も矛盾なく性格描写が為されているのはお吉であろう。お吉は七章から成るこの作品の第二章で初めて登場する。其一でも純之助の口から奉公人に当たっているお吉の様子は語られているが、其二の冒頭には、「片手を帯に挿んで意地悪るさうに横目でジロリと」お銀を睨んでいる様子が描かれている。語り手はお吉の容貌をも

色の淺黒い、鼻のツンとした、眼尻の釣上つた唇の薄い、眉毛の濃い、細面の權のある容貌で、
と紹介しているのである。

が、こうした語り手による描写以上にお吉の人物を端的に示しているのは、お銀との会話の部分であろう。例えば、

「銀、お前知らないのかい、自家の旦那様は養子だよ。（中略）
恚した門構へを張つて區内で指折に數込まれるのは悉皆妾の光輝だアネ。（以下略）」（p193）

「養子のくせに、人が黙つてりやア好い氣になつて、妻の財産を喰潰してゐながら女狂ひも能く出來た（以下略）」（p42）

というように、自分が家附娘であることが常に意識にあるのである。其一の「家附の奥様は正眞の竈神さまで、乃公は先ア天井の鼠同様カナ」という純之助の言葉を裏つけている。

しかし、お吉の疝癩の原因は純之助が養子でありながら「世間並に主人風を吹か」すためではない。原因の殆どは、頻繁に純之助を訪れる静江にある。その厭い方たるや、静江の來訪を告げられただけで「顛顛は忽ちびく／＼と動いて眼尻が釣上」る程のものである。お吉はまず「久しく來ないと思つたら……那樣な衣裳をしてエたい、金時計を下げてたらう？」とお銀に静江の様子を尋ねている。それは静江が身につけている「金時計」や「寶石入りの指環だの繻珍の帯だの」が皆純之助の買ひ与えたものであるためである。お吉にとつては静江の何もかもが気に入らない。「人の家イ來たら、女は女同志で先づ主婦に挨拶する」べきものであるとか、「人の家イ來てまで先生を鼻の頭へぶら下げて」いるとか罵言し、しまいに静江がクリスチャンであることすら「耶穌を奉る人に一人だつてお前、碌な人は無いよ。」と批判するのである。しかし、「お撥」であ

る、「高慢ちき」である、「智慧の廻る摺れ辛し」であると「悪口雜言」するその裏には「遊藝の外は大嫌ひ」で無学なお吉のコンプレックスがある事を記憶すべきであろう。それはお吉が「いくら學問が出来ると志だから」と二人のことを述懐し、自分を卑下して「どうせ馬鹿だと断念するからネ」とくり返すところによくあらわれている。又、お吉が頻りに「二十圓ばかりの教師さん」と静江のことを冷笑するのも、お吉には親が残した財産以外に何も誇れるものがないからである。

お吉と静江の対立はその価値観のあり方にも現われている。静江が断った縁談についても、お吉は、

『好事に十分支度料を出して貰はふツてンだからネ。妾が静江さんなら、氏なくて玉の輿だもの、二ツ返事で直く諾と云ふワ
(以下略)』(p 26)

『福彌さんは才子で男振も好くツて、加之に洋行して免狀まで取つて来た方だし、第一日本で何人と指を折られる素封家の相續者ぢやアないか。(中略)縦令ば自分で身ぢんまくが出来ると技術が有るにしろ、二十圓の教師さんであるより福彌さんの夫人になつて榮耀の仕飽を爲た方が若干好いか知れやしない(以下略)』(p 27)

と語るのである。この価値観の隔絶は純之助のメキシコ渡航に対しても示される。

『何もお前、財産で樂に遊んで行かれるものが并な處へ出掛けなくたツて、好事にも程度があらアネ。』

と、お吉にとっては純之助の「生命たる大計畫」も「好事」としか受けとられていないのである。

こうしてみてみるとお吉は、「家附娘の權威」を振りまわし、奉公人に当たりちらすヒステリックな女性である。また必要以上に嫉妬深く、純之助や静江と対等に話ができない無教養な、世間一般の価値観しか持ちあわせぬ女性でもある。つまり純之助やお八重の思想に対して、封建的旧思想の持ち主として設定されているといつてもいい。

が、お吉の疍癪や嫉妬心は、それなりの必然性を持って生じているのである。例えば、純之助が自身の衣食は勿論、奉公人の給金から「自分の道樂で飼つて置く犬や家禽の餌」代まで「有川家の資産で」賄いながら自分の収入を静江に注ぎ込むこと、「書齋に閉籠つて」「お吉の對手になつて呉れ」ないにも関わらず、静江が訪れるとお吉には「何だか解らぬ話を洋語交りに面白さうに」すること等、お吉を憤らせ、疎外感を抱かせる要素は充分にあるのである。その上に静江に來た縁談を純之助が「唯の義理一遍の取次ぎ」をしただけで熱心に勧めず、静江も静江で「妾は生涯嫁づきません」と断ってしまった一件があつて、二人の關係に対するお吉の疑惑はますます膨らんでいく。そこへ突然純之助からメキシコ渡航を告げられたのである。媒酌人から何も聞かされていなかったお吉の「今までの積重なツた不平不愉快が一時に爆發し、洪河の決潰する勢を以て暗雲に純之助に喰つて掛つた」としても、無理ならぬものがあるのではなからう

か。

ここで注意すべきは、純之助のメキシコ渡航に対するお吉の無理「解が、「積重なった不平不愉快」、言い換えれば嫉妬心や疎外感の上に生じているという点である。無教養なお吉にとって、純之助の理想が「難かしい事」「好事」な事ではないのは勿論であるが、

『今にネ財を欺産騙されつちまうとお俵さんが乗込むんだから
(以下略)』(p21)

『逆も静江さんの様な學校で採られた摩れつからしに協う筈がないサ。(中略)結局は妾が負けになつて見棄てられるのかと思ふと情なくなるワ』(p24)

という言葉に表われているとおり、お吉の不安の根底には二人の關係への疑問がある。メキシコ渡航についても、クリスマス準備等で久しく静江が訪れなかったことから、二人で「暗に默契」した計画ではないかと疑い、「公歴したつて財産を奪つて妾を棄てる口實だ」としきやア思はれないのである。又、純之助がお吉との冷却期間をおこうとして言い出した「全國漫遊の計畫」についても、お吉は

「静江さんでも伴れてくんぢやないか」と心配しているのである。

これらは皆、「妻つて名ばかりで顧眄^{注34}いても」もらえない「女の身」の哀しさを示すものではなからうか。確かにお吉は無教養でヒステリックな、純之助の理想の妨害者ではある。が、その一方、家庭や妻を顧みない純之助の犠牲者という一面を持っているのである。そして、それはお吉が意地を張って反抗しながらも、純之助に「猶だく未練」を残し、口論の末飛び出した純之助を迎えに大磯まで出

かける愛情を持っていることで一層強調されている。

更にお吉には、自分の精神状態を「腹が立つてムシヤクシヤするかと思ふと、急に悲しくなつたり、嬉しい様な氣がすると直復く嫌アな心持になつたり、(中略)矢張病氣かも知れない」と説明し、「沈着いて了うと、今肝癪を起した事が氣の毒で、氣の毒で、なんば奉公人だからつて眞實に濟まないと思ふよ」と詫がる冷静さもあり、其四では善兵衛から純之助が「家内を和合せやう」としていたいきさつを説いて聞かせられると、自らを省みる素直さもあるのである。

このように、お吉は、単に無理解、無教養な妨害者ではなく、女の哀しき、素直さを内に持つ人物として設定されている。この設定の仕方が、其五に於ける静江の純之助批判をより正当な、真実味のあるものに行っていることをおさえておくべきであろう。

いづれにせよ、お吉の性格は、其二に於けるお銀との会話を中心に、ありありと浮かび上がっており、人物描写という点から評価すべき例であろう。

これに対して、主人公である純之助の人物像には矛盾があるように思える。純之助は其一において、今の政治家、事業家を批判し、「一國を擧げて利奔名走に勞らされ」ている状況を嘆息して、

我々はヒューマニチを宣傳し、能ふべくんば世界の軍備を撤回するを庶幾するが故に歴史上必然避くべからざる人種の衝突を救はんが爲め(中略)平和の福音を傳へんとするので、(中略)

此獸慾的競争の高調に乗じて無人の樂郷に新ユトピーヤを創開

かんとするのである。(p 12)

とその抱負を語る人物である。其四では「跌宕狷介敢て人に下らず、堅く自ら信ずる主義を奉じて世間を傲睨する癖物」冠冕に睡く富貴に冷かな男」、或いは「粉々たる世間の功名利録以外に超然として蓋世の經綸を行はんとする大志ある者」、「物堅い謹直な剛毅した氣象」と高い「權識」を持つ人物と形容されている。そんな「經世の大志ある」人物が、「無學で矧分曉で其日々々の贅澤に驕つて化粧三味物見遊山をする外は理想もなく信仰もなく意地もなく緊肅もなく、其上に邪推強く頑くな」金満家の相続者であるお吉と何故結婚したのか。純之助に関する人物造型の矛盾の殆どは、この不自然な設定から生じているといえる。

例えば、二人の生活が全く噛み合っていない様子は、純之助の服装に関する記述にもあらわれている。其一には、

莫大小の襯衣を二三枚着た上にフラネルの單衣と黒ツばい銘仙の綿入とを重ね薩摩の蚊紵の綿入羽織を引掛け、鼠色に化けた白縮緬の帯を繩の様にしごいて締めた風采は、何處やら品格があつても一級所得税を納める區内の金満家らしくは見えないで、(以下略) (p 9)

とあるが、ここに描かれた純之助の服装は書生のそれである。これは其二における

お吉が純之助の衣裳持物を心配して晴の小袖から金時計其他、紳士の躰面を飾るべき一式を揃へたのを純之助は嬉しいと思はずに『乃公には之が相應だ』と書生時代の服装を更めずに唯

の一度もお吉が心盡しを着て呉れなかつた。

という記述と対応している。純之助のこうした態度は服装に関してのみ現れたものではなかつた。「大抵二階の書齋に閉籠つて頻りに考へたり勉強したり」、「頼りない孤獨の身」である静江に時計や指環などを買い与えて「從來」と同様に「應分の世話」を続けたりして、お吉のことは全く気にかけて、頑固に書生時代の生活のペースを崩さなかつたのである。それが有川家にとっていかに違和感のある行為であつたかは、其一に描かれた書齋の様子にも象徴されている。

二室とも書齋らしく奇麗に整理つて、法隆寺模様の段通を一椀に敷詰め、(中略) 先代が好事家だけに何れも由緒ある有川家自慢の逸品を床、違柵に飾立てた中に、表紙の手摺れた洋書、報告書めいた假綴物、(中略) 古新聞で包んだ農産物、薦繩擲げの標本を塵埃と一緒に埒もなく散逸し、折角好事家が忝けなさに涙覆して勿論ながら名物を可惜見勞もなくがらくたの中に埋めてゐた。(p 10)

お吉が、「自家の旦那様は書生さんだよ」と皮肉つぱく言うのも無理のないことであつた。

このように、価値観の相反する者同志を結婚させるといふ設定に無理があることは、作者である魯庵も気づいていたに違いない。というのは、「何故二人が結婚したのか」という設問は作中において繰り返し提示されているからである。例えば、(其四) では、
公歴した拍子か圓轉滑脱の才子肌ならでは及第すまじき養子に

見立違ひをされて、(中略) 苦もなく説落されて驕慢放縱なる世間知らずと借老の契を結んだが、(以下略) (P 51) (傍線筆者)

と記されている。が、ここでも結婚の動機は曖昧のままである。其五では、「初めからお吉を愛しなかつたのだ」という純之助の言葉に対して、「愛しない方と何故結婚なすつた? よもや功名の爲めでも有りますまいネ?」と静江に問わせている。これに対しても純之助は「黙然として了」うほかないのである。魯庵は静江に続けてこう言わせている。

『正可に功名心の爲めと初手から意識なすつたわけぢやアなくて、能くいふ魔がさしたんでせう。勿論愛しないのに結婚するのは世間一統の風ですから、先ア理窟はないものとしませうが(以下略)』(P 64) (傍線筆者)

これとて漠然とした解明しか与えていない。この純之助の結婚は又、其六において『苟くも海外移住の志があるなら養子に行つて好んで繫累を求める事はなからう。既に資産家へ養子に行くつてのが元氣沮喪した十分の證明だ。』(P 85)

と非難されるだけの不自然さを含んでいるのである。これに対して、其四では「有川の資産を目的にしたでない」、其五では「有川家へ養子に行つたのは無論鄙劣な心でなかつた」と純之助に弁明させている。

が、お吉の反対によってメキシコ渡航を中止せざるを得なくなつ

た後の純之助の描写には、やはり無意識にしろ有川家の資産をあてにしていたと思わせるものがある。抑もメキシコへの「渡航費用一萬圓を有川家の資産から支出して貰」うことを結婚の条件として申入れることからしてそうであるが、お吉との離婚を考えた時、まず純之助の念頭に浮かんだのは「有川家の資産を自由に動かし得なかつた不平等と誤解する世間の陰口」であり、「苟くも經世の壮志あるものが區々たる目腐れ金に眩んだ様な氣がして耻かしく思」わずにはいられないのである。又、本家の老人の「離別さつしやい」^{注23}「萬や二萬の端多錢は足下が事業の踐別に私が献じるワ」という言葉に「利刃を以て弱點を劈かれた様な氣」がして、「離別咄を云ひそくくれた上に、全國漫遊の計畫をすら撤回して」、逆に「一家の和熟」を計る約束をしているのである。純之助が離婚を思いとどまったのは、田中栄一氏が指摘しているように「仲人への同情」^{注23}「本家の老人への人情」によってであろう。が、それ以上に、老人の言葉に、自分の「弱點」を認めざるを得ないものがあつたためではなからうか。最終章の其七においては、

左にも右にも初め赤手を以て事を成さうとしたを、不斗した出來心で豫ての素志に背いて富家の子と養はれたのが生涯の失策であつた。(P 96) (傍線筆者)

と、有川家の資産を頼みにしていたと思われる述懐が為されているのである。

更に、純之助の経済能力の問題がある。^{注36}これはこの作品中、殆ど描かれていない。職業についても、僅かにお吉の言葉を通して「新

聞や雑誌に書いたり社の翻譯をしたり」する「學者」であることが醜氣に示されているにすぎない。が、もし新聞雑誌の稿料や翻訳料が唯一の収入源だったとしたら、その額は多くはなかっただろう。

これについては評論や翻訳を業としていた魯庵が「喰ふ爲め」に稿料の高い「小説に指を染めた」という事情からも想像できる。野村喬氏によると、当時の魯庵が文筆で得る収入は一か月平均二十円だった^{注55}という。因に明治31年10月に改正された首相の年棒は「九千六百円」〔官報〕明治31年10月22日〕であり、この作中の一万円という金額が、稿料翻訳料を生活の糧とする者にとって大金であったことは疑いないのである。更に、純之助のメキシコ渡航が時間的にも急がねばならぬものであったことは、其一の

人種の膨脹と社會の逼迫とで必要再然した殖民の競争が漸く激烈となるは既に數年に差迫つた二十世紀で、我々が未來の太平洋問題に處して平和の鑰を把持する盟主となるには北緯三十三度以南の太平洋一帯の地に雄鎮を築くが第一の準備である。

(p 12) (傍線筆者)

という述懐からもわかる。その上に、墨西哥に渡航するに若干の金子が要る。百エクタラや二百エクタラの土地を借りるに若干の金子が要る。珈琲の苗カ、オの苗、葡萄の苗、玉蜀黍や馬鈴薯の栽附をするに若干の金子が要る。

(以下略)(p 96)

という条件が重なって、純之助に「不斗した出來心」を起こさせたことは充分に考えられる。換言すれば、純之助の理想を実現するた

めには、この一万円は必要不可欠なものであった。まして単なる移民ではなく、そこに「ユトーピヤ」を築くための渡航であれば、それなりの準備を必要としたのであろう。極言するなら、純之助の理想は有川家から提供される一万円がなければ実現不可能な机上の空論でしかなかったのである。

と考えると、愛のない、全く価値観の食い違ってお吉との結婚は納得できる。が、反面、「ヒューマニズムを喧傳し」「新ユトーピヤを創開かんとする」大志を抱く人道家純之助の像は大きく揺らぐことになる。或いは静江が言うように、お吉との結婚は「功名心の爲と初手から意識」したものでなかったのかもしれない。「大事業を思立って其慾望が」あまりにも「熾んだツた」純之助には、理想の実現以外のことは一斉の価値を持たなかったに違いない。勿論、「富貴」や「功名」などというものもその例外ではない。が、所詮純之助の「生命たる」理想は、そうした自己中心的な没頭によって築き上げられた「冒險事業」であつて、「純無垢の情」から生じた、大地に根をおろすべき経綸ではなかった。ヒューマニズムを説きながら、自分の行為がお吉や静江、そして最終的には自身をも傷つけることを洞察できぬ「少年の客氣」でしかなかったのである。つまり、ここで描かれているのは、お吉と離婚し老人の志を受けてでもメキシコへ行こうとする程のがむしやんな行動力も持てず、かといって、お吉を愛することは勿論メキシコへの夢を捨てることもできずに悩む中途半端なヒューマニズムの持ち主である。これは其四で「跌宕狹介致て人に下らず、堅く自ら信ずる主義を奉じて世間を傲

睨する癖物」と形容された純之助像では決してないのである。

その他、同様の矛盾は多々見出せる。例えば、メキシコまで出かけようという人物が、お吉の「何時までも釋然たら」ぬ態度に為すすべもなくただ嘆息して、一か月経って漸く「暫らくお吉から遠ざかるのが良策だと」「全國漫遊の計畫」を持ち出すというのは、あまりにも優柔不断で行動力が不足しているのではないか。純之助は「歿分曉で、執拗で、放縱で、邪推深」いとお吉を蔑み、遠ざければかりで自ら積極的に物事を解決していこうという姿勢に欠けている。それはメキシコ渡航を中止し家庭の平和を重んじるという判断に於ても見られることで、本家の老人に「弱點を劈かれ」、静江に功名のために家庭を犠牲にしていると批判されて、漸く決心するに至るのである。又、田中氏の指摘どおり、メキシコ渡航の壮志を抱く人物が「同情」「人情」によって離婚を断念するのも領けないし、それほど人の気持ちを決める人物であるなら、お吉の静江に対する嫉妬心に気づかぬはずはあるまい。まして、お吉は「時とすると、純之助の目の前で夫れと云はずに悪口雑言した事さへある」のである。なのに純之助は其三で、静江と伴にお吉のもとにいき、「静江さんと大盡力で調べて来た」菓子を持ち、「三人でトランプでもやらう」と言う。更にお吉の枕元で静江と二人でカカオの話に興じ、夫婦間の採め事を「静江さんには／＼の粉紅があつたんだと此間中の顛末を委しく話し」て「相談したんだ」と語り、ついには「三人で近縣旅行しよう」と誘うのである。これではお吉の気持ちを逆撫でするばかりである。この無神経さ、鈍感さは、其五では静江に福

弥との結婚を勧めるところや、静江から「愛は既う失くなつて了つてよ」と言われて初めて静江の愛に気づき、しいては自身の静江に対する愛にも気がつくところにもあらわれている。瑣末な矛盾もつけ加えるなら、寝込んでいるお吉に対して「例のヘステリー」だ、「僕を恐嚇する示威運動かも知れんよ」と冷淡であったはずの純之助が、お吉を大磯に誘う場面で、「うむ、先日新調た寶石簪入釘鉦の属いた吾妻コート、あいつの着初をしなさい。」と服装まで指定している点をあげたい。お吉の嫉妬心にも気づかない無関心な人物が果して妻の新調のコートの特長まで知っているものであろうか。こうした些細な指摘は、魯庵本来の批評方法からはずれるので私もこの辺で筆を留めるが、純之助の造型に関してはこのような矛盾点が多く見出せる。魯庵が常に批判した「性情の一致を犯^{注39}」していると言えるだろう。

次に静江について考えてみたい。静江は純之助の亡友の妹で、純之助とは兄妹同然の間柄にあり、純之助が自分の「經綸を話して聞かせ」られる教養のある女性として描かれている。純之助にとって同志を除けば数少ない理解者の一人でもあるわけである。純之助が静江の訪来を心から歓迎している様子は其一における描写からもわかる。静江の顔を見るなり「純之助の淋しい顔は俄に春め」き、十字架を見せられて「無言で微笑し」、夢の話聞いては「阿然と笑」うのである。

しかし、静江は理解者であると同時に批判者でもある。それが端的に示されるのは其五であるが、其一において既に、

『夢は心の反映だから黙示録みた様に解釋の仕方で大變面白くなるワ。昨夜も天使と惡魔の面を前後に有つてるスフヒンクスみた様な動物が蛇や蜥蜴に攻められながら底の無い坑に落ちてく夢を見たの、其動物の胸に墨西哥と書いて有つてよ、(以下略)』(P 15)

と冗談の中に語っている。この「天使と惡魔の面を前後に有つてるスフヒンクス」は言うまでもなく純之助を指し、彼のメキシコ渡航が、一方では人道を説き、一方では「功名心に酔つて」家庭を犠牲にするという二面性をあわせ持っていることを暗示しており、これはそのまま其五で展開される純之助批判の伏線となるものである。

其五における静江の批判は的確で、「人道を説く人が現在の妻を功名心の犠牲にし」している、「柔しい言葉で親切をなすつたつて、智恵の仕業で情が少とも働かないから夫人の胸に徹しないのは當然で」と、純之助の痛いところを突くのである。更に静江は、花々しいヒロイカルな人を驚かす様な、雄大とか壯大とか云ふ事業の好きな方―斯ういふ方は非常な場合の道德だけを重んじて日常家庭の道德は輕蔑してゐらつしやる。ですから道德の理想つても、すばらしい立派な天國や献身的の大事業ばかりで、家庭の幸福なんかは頭から賤んじてますネ。(以下略) (P 63)と述べ、純之助を「家庭の罪人」、そして愛せない理由に妻の「瑕瑾」をあげる「道德の罪人」だと非難するのである。

ここで留意すべきは、静江の設定の仕方が其五における純之助批判を説得力あるものに行っているということである。まず純之助と静

江を兄妹同然の親しい間柄に設定していることが、年下の女性でありながら、面と向かつて純之助を批判できる第一の前提を作っている。次に、静江を教養ある女性として設定しているのは、お吉との対称を際立たせるためだけではない。純之助は同等の教養を持つ「静江が来る度に此經綸を話して聞かせるのを何よりの快事」としており、静江は純之助の理想を熟知した人物として設定されているとも言える。だからこそ、純之助の理想の弱点を衝くことも出来たのである。第三に、静江は生涯を神に委ねようとする敬虔なクリスチャンとして設定されている。これは、純之助のヒロイカルなヒューマニズム―家庭の犠牲の上に立つ人道とも呼べる―と神の愛から生じる静江のヒューマニズムとを対比させ、前者の非を認めさせるためには不可欠な設定であつた。更に静江はかつて純之助を思慕していた女性であり、今は純之助夫婦の幸福を願う中立の立場から真摯に彼を批判するよう設定されている。こうした設定のあり方が、純之助の理想の弱点を衝くに充分な説得力を生んでいるといえるだろう。が、魯庵はこの静江を強靱な批判者としてのみ登場させているわけではない。「愛は既う失くなつて了つてよ」愛がないのに結婚する道理がない」と言いきるその裏には、「誰一人掣肘する者の無い自由の身で」ありながら純之助と結ばれず、今は神に仕えて純之助とお吉の幸せを祈ろうという犠牲愛的な決心があるのである。「大事業を思立つて其慾望が熾んだつた」純之助には静江の愛が見えなかつた。そういう意味で、お吉同様静江も一人の犠牲者なのである。

しかし、お吉から見ればこの静江も又、家庭の幸福を破る加害者

たり得るのである。それがたとえお吉の邪推にすぎなくても、である。そのため、純之助から「だが静江さん、少とは同情して貰ひたい。(中略) 今度の葛藤も墨西哥一條に初まつたんだが、其遠因は全く貴嬢に由来してゐるんだ」と言われれば、「さつと顔を紅め」「垂頭して了」うしかないのである。

お吉の項で述べたように、二人の關係が潔白であらうと、お吉の邪推を誘うだけの要因は静江の中にも見出せる。例えば其一では、「銀が薦めた座蒲團に遠慮もなく座つて、(中略) 火鉢に摺寄つて寶石入と槌目の指環を穿めた眞白き手を惜氣もなく火に磨した」と描写されているが、もしこれが純之助に買つてもらつた指環であるなら、お吉の嫉妬心を買うことは疑いない。又、純之助から相談をうけたにせよ、お吉の気持ちに全く気づかず、夫婦の和合を計る旅行に「ね、夫人、行らつしやいませしな、妾もお伴侶が致したうまいます」と述べる厚かましきなど垣間見えて、其五でお吉の身を思い、純之助を批判する態度と矛盾するものが感じられるのである。が、これは純之助像に見られたような深刻な矛盾ではないと言えよう。

以上、主な登場人物について、その人物描写を見て来たが、お吉、静江はともかく、純之助はやはりその人物造型に矛盾が多いと言わねばなるまい。しかしながら、そのために一つの構図が成立している。それはこの三者が各々一言葉はよくないが―加害者、被害者の両方の側面を持っているということである。お吉は純之助の理想の妨害者であるが、又一面、夫に顧みられない家庭の犠牲者でもある。純之助もお吉や静江の愛に答えることが出来ない点において一種の

加害者であり、又理想を断念せざるを得ない点で誰よりも被害者である。「生涯嫁づきません」と断言する静江もある意味では被害者であり、お吉から見れば夫を奪う加害者なのである。価値観や立場の違いがこうした三者の關係を作り上げていること、そして、従来純之助の新思想に対する封建的思想の象徴のように捉えられて来たお吉や、クリスチャンのヒューマニズムで純之助のエゴを批判する役割ばかりが強調されて来た静江の中にも、二面性が見出せることに留意すべきであらう。

ここで、紙面の關係上詳しくは取り上げられないが、この三人以外の人物描写についてもみてみようと思う。

まず最も活写されているのは高橋善兵衛であらう。有川家の先代に資本を卸して貰つて今では梶善という御店を切り回す善兵衛は、お吉の見初めた純之助との縁談をまとめることで「先代への恩返しが出来たと歡」ぶ義理堅い男である。その職人出身の正直一遍の商人気質は其四に特によく示されている。これについては後述の文章表現の項で取り上げるので具体例は挙げないが、その話しぶり、話題の選び方、ユーモアの効いた比喩の用い方などにありありと描かれている。が、最も善兵衛の価値観を示しているのは、純之助のメキシコ渡航をお吉に伝えなかつた一件であらう。それは「悪義からでなく」純之助が「平生口にする冒険事業は畢竟少年の客氣で、」「家庭の味を試めたら直ぐ消滅して了う」か、もし「消滅しないにしろ」夫婦間で「圓滑く相談が成効る事だと自分定めにし」たためであつたが、ここにも「折角纏り掛つた」ものを「破談するでも

ない」という「家内安全福德無量を祈る」氣質がよく現われている。人物描写の点から言えば、お吉と並んで評価すべきであろう。^{注41}

その他、登場回数少ないが、本家の老人も、「頭から對手にならず、若い者が犬も略はない御馳走は老人殊に辟易すると呵然と笑つて茶にしようつた」、或いは、「煩さき無益の繰言は云はで」「離別さツしやい」と云退け、「足下が事業の踐別に」「一萬や二萬の端多錢」は「私が厭じるワ」と打出すあたり、「潤達な氣象」がよく示されているし、純之助の同志たちの各々の個性や、有川家の奉公人たち——特にベテランのお銀と年のいかなないお浜の違いなども描き分けられており、まずは無難と言うべきであろう。

二、作品構成

魯庵は「小説の主眼は情致なれどもチトの波瀾も照應もなく、又少しの脚色だになければ小説とは云ひがたし」^{注27}「勿論脚色は小説の末技には相違なけれど」「陳套の脚色」は許すべきではない、或いは「よし趣向は小説の末技なり——とするも小説と名くる以上は多少の立案を要すべく、其巧拙精疎に依て多少の評をなすも無益にあらざるべし」^{注42}とその作品評の中で述べている。ここで魯庵の言う「脚色」「趣向」は、作品の組立て——所謂プロットを意味している。「小説の主眼」とは言えないとしながらも、「脚色」の一貫性、斬新さを批評基準の一つにしているのである。

では「くれの廿八日」のプロット——つまり作品構成の方法を見

ていこう。

抑も、この作品は「歳暮の二十八日だといふに」「來陽の準備が猶だ出來ずにある」、その原因となった夫婦喧嘩の真相と、一応の解決をみるまでの顛末を、二十八日一日の出来事を通して描いたもので、七章から成っている。

まず、プロローグにあたる其一では、早速夫婦喧嘩の原因となつた純之助のメキシコ渡航の夢が語られ、遠因である静江も登場している。其二では、お吉が奉公人銀に語る体裁を採りながら静江への嫉妬心、純之助への不満、そしてメキシコ一條の事情がお吉の立場から説明されている。其三ではお吉の心を解さない純之助と静江がお吉の元を尋ね、機嫌を直そうとしながら逆に怒りを買ってしまう様子が描かれている。構成の上から言えば、この其三が、いたたまれなくなつた純之助と静江を外出させるきっかけを作っていることに留意すべきであろう。というのは、其五の上野での静江の純之助批判、そしてお互いへの愛の告白めいたもの、^{注43}続く其六での同志たちの罵言は、有川家内部においては為されにくいものであるからである。更に外出させることによって、一般庶民の暮の慌しき、雑踏に象徴される世間が描き出され、それを全く対照的な世界に純之助や静江、又同志たちが住んでいることをより明らかにしているのである。例えば、其五では、「追がた人の出盛る上野公園も押迫つてからは寂寞として、のんきにステツキを揮回し紙巻煙の煙を顔中に靡かして漫歩く氣樂さうな太平の民」は一人も見掛けないし、其六でも、同志たちの集っている下等料理屋めいた西洋館は、「歳暮の寶

物で平日よりも賑やか」な市中とは違い、純之助に「宛から人生の悲歡が掌返す間に變るを實地に見る」ように「寂寞り物淋し」いところにあるのである。少々横道にそれたが、其三はそのような点で、純之助とお吉の対立の深さを示しているだけでなく、作品に描かれる空間を外部へと移行させる役割をも果しているのである。其四ではお吉の元を訪れた善兵衛によって、お吉は諭され、其五では静江によって、「夫人を功名心の犠牲にしている」と純之助が批判され、家庭の幸福に生きようと決心するに至るのである。つまり、其三で決裂してしまった夫婦の綻が、善兵衛の実直な説論によって、或いはクリスチャン静江のヒューマニズムによって繋ぎとめられている。そういう意味で其四、其五は一对の構図をもっているのである。そして其三をきっかけに外出した純之助は静江と別れた後、思いがけず同志と出会い、書生たちの集う席でメキシコ渡航中止を告げねばならぬことになる。それが其六である。其五で静江によって批判された純之助を、更に同志の中に置くことで、その挫折感は一層高められているのである。エピソードの其七では人道的社会事業だと信じて来た純之助の理想は否定され、「滑稽^{注44}」としか言えないような自分の境遇を認めた彼は、「家庭に身を殉ずる決心の臍を堅く」するのである。「爰々たる讀書燈の圓圈に照らされたプレスコットの征略史は俄に色褪せて懐める様に見える」という記述はその純之助の心境を象徴しているかのようである。そして元且、華やかな春の描写でこの小説は締め括られるのである。

以上が「くれの廿八日」の各章の内容と構成である。夫婦の不和

が解消される過程——これは同時に純之助の理想の挫折の過程でもあるが——を、暮の二十八日の早朝から夜ふけまでに起こった出来事として、矛盾なくまとめ上げている、といえる。

又、各章のつなぎ方にも工夫が見られる。例えば其一を

『銀や。』とお吉の甲走った聲が全家を劈くばかりに聞えた。

『銀や、銀や、銀や』

という一文で終え、続く其二を

『聞えないッて、聞えない事があるもんか』

というお吉の言葉で始めているところなど、その好例であろう。其二、其三に於ても、こちらへやって来る純之助と静江の姿にお吉が気づくところで其二の筆をおき、其三の三人の様子へとつながせている。場面の變化に自然な流れを持たせているといえるだろう。

では、この構成のあり方を、魯庵の評価基準に照らしあわせてみるとどうであろうか。魯庵が最も重要とした一貫性も認められるし、各章も決して同一趣向によるものではなく、起伏に富んでいる。登場人物が少ないにも係わらず、場面の展開によって単調にならない工夫が施されているようである。構成方法に関して言えば、まずは評価してよい出来であろう。

三、文学表現

では最後に「くれの廿八日」の表現について論じてみたい。小説において「文字」は最も重要なものでないと瑣末な文章表現に囚われ

すぎることを批判し、人物描写を助ける「眞摯な文字」を求めた魯庵であったが、この理論は実作にも生かされているだろうか。

まず評価すべきは会話の部分である。口語を巧みに文字化してリアルティを持たせている。^{注45} その好例はお吉であり善兵衛であろう。例えば、お吉の場合、

『人ウ馬鹿にするものも好い加減におし。元來なら寝てエるんだもの(以下略)』(P19)

『人の家イ來てまで先生を鼻の頭にぶら下げなくても可さうなもんだネ：澄アしたもんだ(以下略)』(P20)

『悉皆静江さんに人上げツちまうんだよ。(中略)金時計だつて中々廉かアないやネ(以下略)』(P21)

というようにである。「人」にわざわざ「シト」とルビをつけているところにも関東方言を生かそうとする工夫が見られる。善兵衛に關しても、

『解ツた、銀どんの心持は能うく解ツた。最も聞かねエでも解ツた、何でもナア、丸るくく——善兵衛生得いて大嫌エは松魚の鹽辛と女の慣れた面：』(P47)

『あツしはネ、旦那の肩を持つンぢやねエが、此家の旦那は石橋を敲いて渡る處ぢやがアせん、ダイヤモンドに白金を被せた鞆ぢや溶けねエツて堅固人で(以下略)』(P49)

『高橋善兵衛晝寝しても龜の甲より年の功、五十何度大晦日に責められたお庇に袋物と人間の鑑識は滅多に敗を取らねエ積りです。』(P49)

というような話しぶりに、善兵衛の性格や商人気質がよく出ている。その他其六における演説にも書生たちの口調が生かされていて、会話によって人物描写が深められているのである。この会話部分が作品全体を活性化させることにも役立っているのではなからうか。

次に留意すべきは、心理描写に比喩(若しくは象徴法というべきか)を多用している点であろう。其一で、純之助が積年の夢であったメキシコ渡航を中止し、「家庭の和熟」に身を呈する決心をした、その心境は、純之助が吟じる「日月籠中の鳥、乾坤水上の萍」という古詩、或いは「和順齋家之本、循理保家之本」と毫を揮い「告朔餼羊坊」と落款した紙が「部屋の中で何よりも一番目に着いた」というあたりに象徴されている。又、前述したとおり「天使と悪魔の面を前後に有つているスフィンクスみた様な動物」は比喩の好例であろう。その他、本家から静江に縁談を申し込んで来た際のお吉の気持ちには「恰度重圍に陥ちた城兵が味方の援軍を望んだ様」だったと表現しているし、妻を犠牲にして理想を実現しようとする純之助の態度を、静江は「精神的に夫人を殺して墨西哥に肉饅頭を献じている」と喩えているのである。その他、其七では「キサンテツプ」、純之助の見る「イリュージョン」、色褪せた「プレスコットの征略史」等、皆純之助の心境を象徴しているのである。それが成功しているかどうかは一概には言えないが、その工夫は評価すべきものがあるであろう。

しかし、長所ばかりではない。魯庵は「五月蠅迄にクドキ言葉」^{注47}「虚偽の文字」^{注48}「似た様な文句」^{注46}が多すぎては作品を損ねると度々

批判しているが、自らもこの幣に陥っている。例えば、其一の、善兵衛と出かけて夜更に帰って来た際の純之助の描写には、「不思議」が五回繰り返されているし、翌朝の描写には「珍らしく」が七回用いられている。又其二では、お吉の心配の理由を説明するのに「面白からぬ」を四回、静江が縁談を断つた際の描写には「加之も」が三回続けて使用されている。この繰り返し強調法として効果を上げているかどうかは極めて疑問である。

右は同じ言葉の繰り返しであるが、類似の表現による描写も多々見出せる。例えば、其一の純之助の苦悩は、「苦い顔をして、深い溜息を吐いて（P 8）」「么麼やら面白からぬ顔をして（P 9）」「嗚然として歎息した（P 9）」「純之助の苦り切った顔を（P 15）」、其二におけるお吉の癩癩の様子は、「後れ毛の煩きうにパラ／＼下がるを前歯でギリ／＼と噛んで（P 18）」「焦れて前歯でギリ／＼噛んだ（P 22）」「前額に青筋を出して（P 19）」「癩癩は忽ちびく／＼と動いて（P 20）」、其五の二人の態度の違いは、「女は一向平氣に澄し込んで（P 60）」「女は平氣に澄し込んで（P 63）」「女は少とも萎まずに然も思切つて小氣味よく（P 60）」「女は言葉鋭く凛然と（P 62）」「女は次第に舌鋒鋭くなくって（P 62）」「女は一向怯げないで舌鋒益鋭く（P 64）」「女は終に凛平と（P 65）」「男は愕然として黙つて了つた（P 60）」「男は愕然として女を顧瞻いた（P 63）」「男は黙然として了つた（P 64）」というように、極めてよく似た表現で示されているのである。これらが「うるさくも全じ言葉を繰返す」という批判に当てはまらないであろうか。

魯庵は又その批評に於て、読者に理解できないような一人よがりの「比喩造語」、難解な用語を退け、「平易な文字」「平俗の文字」、読者に「同感の意」を起こさせる「眞摯」な文字を評価していた。が、「くれの廿八日」は、必ずしも「平易な文字」や「同感の意」を起こさせるに足る文字によって書かれてはいないようである。文体こそ違ふが、其一で純之助が語るメキシコの歴史や社会批判、抱負（P 11～P 12）は魯庵の評論の叙述とさして変わらぬし、「告朔餼羊坊（P 10）」の意味を即座に理解できる読者は多くはないだろう。一方、純之助、静江の洋語まじりの会話は、当時の知識人の風を伝え、お吉との対称、違和を強める上で重要な役割を果たしており、漢字に洋語のルビを付す方法で語の意味を伝える工夫が為されているといえる。唯、其七の「イリュージョン」中にはスペイン語が原語のまま挿入されている。イメージを伝えるためのねらいであったかもしれないが、「難解な文字」は避けるべきだとする魯庵の主張には反しているように思われるのである。

このように、「くれの廿八日」は会話部分や比喩、象徴法の駆使等に表現上の工夫も認められるが、魯庵が常に求めていた読者に「同情」を抱かせるほどの「辛摯」な「文字」であるとも言えないのである。勝本清一郎氏の「本職が書いた小説」とは認められない、という批判もこの表現上の稚拙さに拠るのかもしれない。

おわりに

以上、魯庵の評価基準を用いて「くれの廿八日」の本文を解説して来た。文章表現の欠陥を取り立てて作品全体を論じることには、「小説は文章を第一の目的となすにあらざ^{注54}」とした魯庵の文学観に背くことになろうから繰り返さないとしても、主人公純之助の人物造型上の矛盾が作品全体の弱点ともなっていることは大いに批判すべきことである。「キヤラクターこそ肝心」であるとする魯庵の評価基準からしても、主人公の性格破綻は、この一点をもって作品全体を否定できるほどのウエイトを持っているといえるのではないか。とすれば、木村毅氏の「明治文學としても屈指の名篇」とする評価は過大評価であると言わねばなるまい。

では何故、繰り返し「小説に重んずべきは」人物描写であると唱えた魯庵がこのような誤りを犯したのであろうか。前述したように、純之助の人物造型上の矛盾はお吉との不自然な結婚に生じている。この小説は、言わば価値観の相反する女性との結婚によって、純之助の理想を発展しようのない状態に設定したところから始まっているのである。とすれば、魯庵がお吉との結婚を設定したのは、純之助の理想を挫折させるためであったと考えられるのではなからうか。そして、あえて不自然な設定をした、ここにこそ、この小説で魯庵が描こうとした主題があるのではないかと思われるのである。では、そうまでして否定されなければいけない純之助の理想の实体とは何

だったのであろうか。

其一で純之助の理想は「ヒューマンチイ」による「新ユトーピヤ」の建設だとして語られる。が、これは旧思想、或いは家の具現であるお吉によって、まず物質的に挫折させられる。しかし、この段階では純之助の理想自身は少しも傷つてはいない。お吉の反対によって一時中止はしたが、純之助の内部では依然、人道的社会的事業として認識されているからである。純之助の批判が精神的に挫折させられるのは——言い換えれば、その根底から否定されるのは——静江の批判によってである。前述したように、静江は純之助の理想を熟知する人物であり、又、信仰による——つまり「純無垢の情」からのヒューマンイズムを抱く人物である。そのように設定されている静江によってこそ初めて、純之助の理想が家庭の犠牲の上に築かれていること、そして純之助の説く人道が「少年の客氣」から生じるものであることが明らかにされたといえよう。

と考えると、魯庵が主題としたものは、家の問題でもなければ、単なる知識人の苦悩でもない。もし、理想と現実の相剋を描くことに目的があったのなら、純之助の理想そのものを否定する必要はなかったはずである。が魯庵はみごとに否定している。^{注55}そして、ヒロイカルなヒューマンイズムは結局、「架空の夢想」にしか行きつかないことを描いているのである。このヒロイカルなヒューマンイズムの否定が、真のヒューマンイズムとは何か、という問いかけを内包していることは言うまでもない。ここに小説家魯庵の描こうとしたものがあったのではなからうか。「得やうと思へば得られた愛を棄て、今

日の不平不愉快を求めて買ったのは全く自分の罪過だ」と「其運命に黙従し」、「お吉の幸福に殉じ」という純之助にとつては残酷としか思えない結末を与えたところにも、純之助のヒロイカルなヒューマニズムを批判する意図の強さが窺えるように思われるのである。

この論の冒頭で、「くれの廿八日」を「社会小説」とみるか否か、現在における諸論を紹介したが、右に述べたとおり、私はこの小説を「社会小説」だとは考えていない。勿論其一の純之助の理想や、其六の書生たちの演説、或いはお吉と奉公人の關係に「社会小説」としての素材は含まれているかもしれない。又、静江を通して信仰の問題が提示されているかもしれない。が、これらは皆素材であつて、魯庵が描こうと主眼をおいたものではない。例えば、純之助の「生命たる」メキシコ渡航注57すら、抽象論をくり返すばかりで何の具体性も示されていないのである。

このことは、この小説が「くれの廿八日」という、年末の慌しさの中に設定されながら一斉世間から隔絶した世界の中で展開されていることにも象徴されている。僅かに其四でお吉を尋ねて来た善兵衛が「こいつア策つた、十二時だワイ」「歳暮ががす、爾うしちやるられねエ」と浮世を感じさせているだけで、経済的に何の心配もないお吉は勿論、前述したとおり純之助も静江も同志たちも皆、世間の風に染まらない「太平の民」ばかりである。純之助の理想や同志たちの話の中に社会は垣間見えても、作品の舞台は全く世間から切り離されている。この小説が有川家の暮の描写に始まり、そして又有川家の新春を写して終えられているところにも、魯庵の主題

が社会ではなく、内的なものにあつたことが窺えるのである。

が、其七の結びの部分、華やかな新春の描写の中に、純之助の名だけが出て来ないこと、又、「之からが中々難かしかんベエ」という久助の言葉で筆を置いていることなど、純之助が果して智恵からではなく情からお吉を労り、家庭に身を殉ずることが出来るかどうか、新たな展開の糸口を暗示しているように思える。「社会小説」として描こうとするなら当然書き継がれるべきであつたろう。が魯庵は「本篇は腹案なる長篇の發端とも見えるべきものなれば」と自ら記しながら続篇を書きはしなかつた。ここからも、メキシコ渡航をはじめとする所謂「社会小説」的要素が、魯庵にとつてそれ以上の発表を要さない素材であつたことが推察できるのである。

本稿では、本文の読解を中心に「社会小説」と見做さない理由を述べた。次稿では更に、評論との關係においてその理由を述べるつもりである。「くれの廿八日」を日本近代文学史の主流と傍流の「結節点」だとする猪野氏の捉え方が妥当であるかどうかについても次稿に譲りたいと思う。

注 記

(1) 見易さを考慮し、年月は算用数字で表記した。

(2) 「新著月刊」第2年4巻、表紙目次には「内田不知庵」、本文題号の下には「魚日庵魯生」と記されている。

(3) 現在ゆまに書房から野村喬氏の編で刊行中。全14巻の予定である。

- (4) 『現代日本文學全集』41 (昭5・7改造社)
 『現代日本文學全集』53 (昭32・10筑摩書房)
 『日本現代文學全集』8 (昭42・11講談社)
 『日本近代文學大系』50 (昭48・4角川書店)
 『明治文學全集』24 (昭53・3筑摩書房) 等に収められている。
- (5) 『くれの廿八日他一篇』(昭30・12)
 (6) 『明治文學展望』(昭3・6改造社)
 (7) 『帝國文學』(明31・4・10)「雜報」欄の「其基督教の炎々たる信仰を活現するに於て、和氣霸々たる家庭の描出を歸結と爲すに於て、余輩は十分に宗教小説と家庭小説との萌芽を看取し得た」という評、或いは、「國民新聞」(明31・3・18)「一話一言」欄の「着想と結構、恰も所謂光明的小説の歡迎さらるゝ折柄、熟達せる筆路に寫し出せる理想的小説」という評等がその好例である。
- (8) 『明治文學史』下巻 (昭24・10東堂堂)
 (9) 『日本近代文學研究』(昭25・4東大出版)
 (10) 『近代日本文學講座』Ⅲ (昭28・河出書房)
 『日本現代文學全集』8 解説 注(4)参照
 (11) 『近代日本文学史研究』(昭29・1未來社)
 (12) 『内田魯庵論』(『日本文学』4—5 昭30・5)
 (13) 『自然主義研究』上巻 (昭30・11東京堂)
 (14) 『くれの廿八日他一篇』解説 注(6)参照
 (15) 『日本文学史』12 (昭33・9岩波書店)
- (16) 『社会小説の発展—明治三〇年代社会小説(二)—』(『文学』27—9 昭34・9)
 (17) 『内田魯庵』(『解釈と鑑賞』25—12 昭35・10)
 (18) 『内田魯庵』(『日本文学』14—11 昭40・11)
 (19) 『社会小説論—その源流と展開—』(『日本近代文学』7 昭42・11)
 (20) 『内田魯庵における小説観』(『青山語文』6 昭51・3)、
 『内田魯庵の社会小説』(『青山語文』8 昭53・3)
 (21) 『民友社の文学』(昭60・5三二書房)
 (22) 『時代精神と社会小説の論』(『国文学』7—1 昭37・1)、
 『近代文学史認識の留意点』(『文学』32—8—9、昭39・8—9)、
 『くれの廿八日』の性格考』(『日本の近代文学—作家と作品』昭53・11・角川書店)、
 『内田魯庵全集』9 解説 (昭60・2ゆまに書房)
 (23) 『くれの二十八日』論—その文学史上の位置をめぐって—
 (『新潟大学教育学部長岡分校研究紀要』13 昭43・2)
 (24) 『くれの廿八日』と『文学一斑』(『国語と国文学』49—9 昭47・9)
 (25) 『くれの廿八日』論—「書生」から「大人」へ—
 (『上智近代文学研究』2 昭58・8)
 (26) 『魯庵と社会小説』(『近代文学』2 昭52・9有斐閣双書)
 (27) 『女學雜誌』132・134 明21・10—11 署名不知菴主人

②9 これについては拙稿「内田魯庵文芸批評の研究 (一)〜(四)」

〔樟蔭国文学〕17〜20 昭54・10〜58・2)で取り上げている。

②9 「紅葉山人の色懺悔」〔女學雜誌〕158・159 明22・4)

署名藤の屋

③0 「蝴蝶」〔いらつめ〕20 明22・2) 署名不知庵主人

③1 「篁村先生の『當世商人氣質』」〔女學雜誌〕185 明22・11)

署名其川子

③2 「紅葉山人の『南無阿彌陀佛』」〔女學雜誌〕170 明22・7)

署名南仙子

③3 参考までに引用文には『内田魯庵全集』9に於ける掲載頁を付した。

③4 小泉氏は、従来の論に「お吉の側の人間的苦悩を見過す傾きがあった」と指摘し、お吉の「正當な言分」を認めている。が、お吉を「作中唯一の無力な存在」としており、その点が私見とは食違っている。注②4参照

③5 この矛盾は既に浩々歌客が「國民之友」(明31・4)で指摘しており、田中氏(注②3参照)により追究されている。

③6 この「経済生活の不可解さ」は高橋氏によっても指摘されている。注②4参照

③7 「暮の二十八日」其他〔早稻田文學〕240大15・1)署名魯庵生

③8 「内田魯庵全集」9解説 注②3参照

③9 「もしや草紙に就て」〔女學雜誌〕143・146 明22・1)

署名不知庵主人

④0 静江の其一と其五に於ける人物像の食違いは、浩々歌客(注②3参照)や出門一笑生(國民新聞)明31・3・18)によって指摘されている。

④1 お吉、善兵衛に人物描写の卓逸を認める指摘は「早稻田文學」(明31・5)にも見える。

④2 「忍月居士の『お八重』」〔女學雜誌〕161・162 明22・5)

署名藤の屋主人

④3 高橋氏は其五に於てのみ「純之助と静江を単に『男』『女』と呼んでいる点を指摘しているが、互いの胸中にあつた想いを確認する場面に、この呼称を用いた作者の工夫が窺える。注②4参照

④4 魯庵は「かくれんぼ」評〔國民之友〕129 明24・7署名

F.C.A.)の中で諷刺の観点から、どんな偉業も功德も「忽て人事(中略)客觀的に見れば共にコメディイならざるはなし」と述べている。同様に其七の純之助の「滑稽劇」だという嘆きには、その理想に対する作者の諷刺がこめられているのではなからうか。

④5 高橋氏は「細微に渡る発話の再現」と魯庵が評価していた京伝・三馬との関連についても指摘している。注②4参照

④6 「眞美人を評す」〔女學雜誌〕137 明21・11)署名不知庵主人

④7 「詩文の粉飾」〔國民之友〕66 明22・10)署名不知庵主人

後「文藝小品」所収。

④8 「漣山人の『初紅葉』」〔女學雜誌〕163 明22・5)署名ふ、ち、

④9 「文覺上人勸進帳を讀む」〔女學雜誌〕139〜142 明21・12)

署名不知庵主人

- 60 「柳浪子の『殘菊』」(『女學雜誌』189 明22・11) 署名其川子
- 61 「ブラジルの文豪シルギオ、ディナルデ」(『太陽』5-4 明32・2) 署名不知庵主人) 中の「インノーセンシヤの事跡」を述べた部分等は特に類似している。浩々歌客(注68参照)が、「情を描くに切なる詩歌的」筆致ではなく、「なほ批評的」である点を指摘したのも無理ではない。
- 62 文章表現に関して「めさまし草」(巻29 明31・7)の「雲中語」欄では、「いつもの生硬なる漢語ちらほら見ゆれど、大分讀み好くなりたり。洋語は作者に素養ありて用る錯らざるゆゑ、多けれども耳に障らず。」と評価している。逆に「新小説」(明31・4)の「評苑」欄では、忍月によって「餘りに洋名洋語の多きには小膽の讀者に取りては迷惑なり」と批判されている。
- 63 「座談会明治文学史」(昭36・6 岩波書店)
- 64 「紅葉山人の『戀山賤』」(『女學雜誌』187 明22・11) 署名不知庵主人
- 65 高橋氏は作中の「冷笑的調子」の中に「純之助の理想を、語り手また作中人物の言から戯画化し、シニカルに批判する方向」を見出し、「純之助の書生的な『理想』の質そのものが問われている」と指摘している。注68参照

66 作品の中にキリスト教やメキシコ移民の問題を魯庵が盛りこんだのは、故意に時代の要請に答えたためというより、偶々身近に取材するところがあつたためではなからうか。魯庵の婚約者敬子はクリスチャンであつたし、魯庵自身もフルベッキ氏との交流を通してキリスト教には詳しくあつたはずである。メキシコ移民についても民友社員菊池長風から取材するところがあつたと野村喬氏が指摘している。注68参照